

INTERVIEW

多久市立病院
小林孝巨先生



地域医療に情熱を注ぎたい

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

離島の一人診療所に総合内科医として赴任

山田隆司(聞き手) 今日は、今年の「第17回へき地・地域医療学会」で、高久賞を受賞された佐賀県の小林孝巨先生を、多久市立病院にお訪ねしました。この度はおめでとうございます。

小林孝巨 ありがとうございます。

山田 高久賞の講演では、主に先生が離島に赴任されているときの経験を話されたと思いますが、今日はそのお話も含めて伺いたいと思っています。まず、通例ですので、先生が卒業されてからここに至るまでの経緯を簡単に紹介してください。

小林 2016年に自治医科大学医学部を卒業しまして、佐賀大学医学部附属病院と佐賀県医療セン

ター好生館で初期臨床研修を行いました。初期研修後に唐津赤十字病院という、県の北部にある300床ぐらいの病院で離島前研修を行いました。その後2年間は小川島診療所に赴任しました。

山田 離島前研修というのは1年間ですか？

小林 1年間です。

山田 2年間の初期研修はローテート研修ですよ。唐津日赤での1年間の離島前研修というのは何か特別なプログラムが組まれているのですか。

小林 初期研修は一般のローテート研修でしたが、離島前研修も自分が島に行っても必要だと思う診療科を選んでローテートするという、初期研修

の延長のような感じでした。上部消化管内視鏡、胃透視、腹部エコー、関節注射、小児科の診察などの手技の習得に必死でしたね。

山田 初期研修2年目のときに離島に行くことは決まっていたのですか。

小林 そうですね。

山田 佐賀県には離島はどのくらいあるのですか。

小林 馬渡島、小川島、加唐島、神集島は一人診療所で、高島は常勤医がいなくて往診で回しています。それらの島に自治医大卒業生が代々赴任しています。

山田 離島というと、長崎県などは本格的な大きな島が多いですが、佐賀県はそれほど遠距離ではなくまとまっている感じなのですね。そうすると佐賀県は、卒業生が赴任するような山間へき地はあまりないのですか。

小林 佐賀県では、卒業生が山間部の診療所へ行くことはほとんどないですね。

山田 なるほど。それで先生は4年目、5年目と小川島に行かれたのですか。

小林 はい、小川島診療所で総合内科医として診療

しました。でも整形外科医を目指していたので、唐津赤十字病院の整形外科で週に1回研修させていただきました。

山田 はじめは小川島へは通っていたのですか。

小林 そうです。前任の先生もそうでしたし、勤務している事務員や看護師の方も陸地から通いでしたので、私もはじめはそうしていました。

山田 通勤できる距離なのですね。

小林 唐津市内から呼子の船着き場まで車で40分、そこから小川島までフェリーで20分なので1時間で通えます。

山田 島の人口はどのくらいだったのですか。

小林 私が赴任した頃は300人程度だったと思います。

山田 それなら穏やかな感じですね。外来患者も1日10人くらいですか？

小林 10人前後でしたね。お年寄りばかりという感じでした。でも小川島には保育園と小学校があり、子どもも沢山いましたので、急な発熱や腹痛などの対応もあり、最初はとても不安でしたね。

地域に密着した医療を実践

山田 先生が高久賞の講演で話されたのは、その小川島でのことですね。途中から島に住むようになったのですか。

小林 台風や天気が荒れて船が出ないことが度々あり、「何かあったときに心配」という声も多かったのですか。またお看取りの患者がいて、「夜もいてほしい」という声があり、診療所の2階に

住むことにしました。でもしばらく誰も住んでいなかったので電気もつかず、お湯も出ず……島には食材を十分に買えるようなお店もないので、釣りに出かけて獲った魚を食べるというサバイバル生活のようでした(笑)。

山田 小売店もないのですか？

小林 小さい駄菓子屋や酒店、漁業協同組合があっ